

中谷 英明

領域代表

「古典学の再構築」は発足以来2年半を経過し、5年計画のちょうど半ばにさしかかった。ここで、このプロジェクトの理念と研究経過を簡単ながら報告しておきたい。

1. 古典と古典学について

(1) 文明と古典

古典は、人々の叡智の精髓である宗教聖典、神話、哲学書、法典、文芸作品、史書などとして諸文明において創造され、伝承され、また自ら素材となって新しい古典を創造する、ということを繰り返してきた。宗教規範や社会慣習、あるいは法律や政治綱領をつくりなし、また倫理的、美的源泉となりつつ、古典は文明の精神的根幹を形成し、その活力の本源となってきた。大規模な社会変革が生じた時には、従来の古典の伝統を継承して新しい古典が創出された。このように古典は社会に求心力と推進力を次々に与えつつ伝承され、受容されてきたと言える。

(2) 近代古典学の使命

18世紀末から19世紀前半のヨーロッパにおいて、自然科学において顕著な成果を挙げた近代科学の方法論と技術が、古典研究へ応用され始めた。こうして近代古典学は、ギリシア・ラテン、イスラエル、イスラム、インド、イラン、中国、日本、チベットなどの古典を対象として次々に成立していったが、これは産業革命とフランス革命を経たヨーロッパが、外の諸文明の古典を当時の西欧の新しい技術と価値観によって把握し、近代社会にふさわしい新しい古典像、ひいては世界観を形成する営為に他ならなかった。

近代古典学は、科学的思考に裏打ちされた文献学的手法によって伝統的古典学の恣意性、非論理性、非実証性を打ち破り、サンスクリット文法学、清朝考証学、日本学の一部などを除き、伝統古典学を圧倒し、確たる学的基盤を確立した。

日本は、明治の中期からこれら諸古典学をヨーロッパから移植し、今日ではすべての主要な文明の古典に関して高水準の研究を擁するに至っている。これら古典諸学の成果は、明治以来、日本人の世界観を形成する上で大きな役割を果たしてきた。

(3) 現代世界の古典学

成立以来2世紀近くを経過し、近代古典学を取り巻く世界は大きく変容した。運輸と通信手段の発達によって諸文明世界は緊密に結ばれ、多極・多文明世界へと変貌しつつある。

現在、科学技術を伴ってヨーロッパ文明が全世界を席卷しているが、世界観に関しては、キリスト教も、西欧人間中心主義も、ヨーロッパ文明という1地域文明の産物にすぎない。中国、インド、イスラーム、イスラエル、日本などの他の伝統文明も、それぞれヨーロッパに比肩する古典群を創造し、豊かな文学のほか、儒教、ヒンドゥー教、仏教、イスラーム教、ユダヤ教、神道など、独自の精神世界を形成しており、これらの世界に西欧世界の価値観を敷衍することには無理がある。多様な伝統と価値観は、それぞれ尊重されなければならない。

この時代にあって、古典学も変わるべきであろう。方法論や学的枠組みに潜む近代西欧的価値観（キリスト教以外の宗教の軽視、合理主義の偏重、西欧中心主義）の見直しが必要である。近代西欧の思想的、文学的概念を用いて古典を分析し、理解する従来の方法は、古典の理解に十分とは言えない。

この見直しは、諸領域の古典研究者が文明ごとに孤立的に行うのではなく、連携しつつ、共同で行う必要がある。異領域の研究者の対話は、互いに触発しあって新視点の発見に繋がり、多様な古典のいっそう正

確な理解へ導くと考えられる。古典学の刷新を、単に19世紀西欧の価値観を20世紀日本のそれに置き換えるだけに終わらせないためには、研究者自身の視野を広げる、この種の対話が不可欠である。

(4) 「古典学の再構築」と一般古典学

特定領域研究「古典学の再構築」は、このような目的に向かって、成立以来2世紀近く続いた諸領域の古典学の孤立を解消し、全ての主要な古典学の連携研究を実現した。

さらにまた、近年の高度な情報処理技術の古典学の一部の領域への応用も、このような包括的連携を要請している。古典学はこれによって研究精度、研究範囲が飛躍的に向上し、質的に変化しつつある。古典文献処理の標準技法を確立し、これを古典学の全領域に普及させることは重要課題である。

このように現代古典学は、多極・多文明時代にふさわしい客観的な視点の獲得と、高度情報処理技術の応用という新しい方法論によって、諸文明の古典のより正確な理解と、隠された価値の発見に努めなければならない。

この新しい標準的方法論によって行われる古典学は、「一般古典学」の名で呼ぶことが許されよう。それは全ての古典学の方法論を付き合わせ、検討したところから生まれる方法論であるから「一般」であり、また、全ての領域の古典に適用されるから「一般」でもある。ただし一般古典学の方法は、全ての領域において同一である必要はない。高度な水準の共通する方法論の上に、文明によって種々の個別的方法があるべきである。

(5) 一般古典学がめざすもの

一般古典学は、まずは諸文明の古典の伝える人生観、世界観、あるいは美的感覚を、その多様性において、可能な限り正確に認識する。しかしそれに止まらず、それらの評価に踏み込み、新しい価値、新しい古典の発見に努める。こうして従来の古典像は大幅に刷新されることになるであろう。

このようにして獲得された新しい古典像は、日本においては日本語訳として提出されることになる。それは日本人の精神性を豊かにし、世界観形成に貢献して新しい日本文明創出への礎(いしずえ)となるであろう。それはまた将来的には、地球文明時代の世界の精神基盤となる新しい普遍的価値観形成にも資することになるであろう。

将来古典学は、欧米だけでなく、他の国々においても徐々に基盤が確立されてゆくと予測される。このよ

うな古典学の全地球的なあり方への変化を後押ししよう、欧米だけでなく、アジア、中東、南米、オセアニアなどの研究者とも密接な連携を保ちつつ、一般古典学は構築されることになるであろう。

古来、日本文明は周辺の文明の高い文化を摂取しつつ自律的發展を維持してきたが、近世絵画や陶芸などごく僅かの例を除き、他の文明に影響を与えたことはかつてほとんどなかった。一般古典学が前提する古典学の包括的連携は、すべての古典学の領域に高水準の研究が維持されている日本においてのみ可能であると言える。日本に構築された一般古典学は、世界の古典学の刷新と新しい価値観構築への貢献という学術的、文化的発信を、世界に向かって行うこととなるであろう。

遺伝子工学、情報処理、核兵器を含む軍事技術等に象徴される科学技術の飛躍的發展は、影響力の巨大さに鑑み、これを用いる人々の確固とした価値観の存在をいよいよ重要なものとしている。技術の巨大化に見合った新しい価値観の形成が急務であり、この意味において一般古典学の責務は重い。

2. 「古典学の再構築」の研究活動の概要

特定領域研究「古典学の再構築」のこれまでの研究経過と今後の課題の概要は次のとおりである。

(1) 研究活動

特定領域研究「古典学の再構築」は、平成10年8月より総括班研究が発足し、11年度から計画・公募両研究の全体(75課題・参加研究者138人)が開始された。

この間に、5回の公開国際シンポジウム、10回の総括班会議、19回の調整班会議(研究会議)を開催し、討議を行ったほか、ニューズレター『古典学の再構築』(7号を発行)や雑誌『古典学の現在』(1号を発行)、また『研究成果中間報告集』(平成12年10月)によって研究成果を参加研究者全員に周知させ、共同研究を一層充実させてきた。

(2) 日本学術会議への提案

総括班は、日本学術会議第1部に「新しい価値観の構築と古典学研究所の設置について」を提案し、3研究連絡委員会において報告として採択された。この提案は、新しい価値観構築において古典学が主要な役割を果たすことに鑑み、古典学の拠点となる大学共同利用機関「古典学研究所」の設置を提案するものである。

(3) 総括と見通し

高度の論理性と実証性を備える近代古典学において、最近、自らその内にある近代西欧固有の価値観を払拭しようとする努力もなされているが、なお不十分と言わざるを得ない。このような努力を継続する必要がある。

ことに翻訳における訳語は、原典のヨーロッパ語訳の訳語としての日本語でなく、あるいはまた漢訳仏典の訳語など既成の語彙を借用するのではなく、原典本文の意味を最も正確にうつす日本語を用いなければならない。翻訳は文化的創造であることを自覚し、古典研究者自身の日本語の感性を洗練する必要がある。

近代古典学発足以来、後代の注釈によって原典を読み解く方法が王道とされてきたが、テキストデータベースが整備されつつある今日、注釈によらず原典そのものから読みを確定し得ることが多くなりつつある。このような方法論的見直しも必要である。

戦後、古典は価値評価を抜きに研究される傾向があった。古典研究者自身が古典を文明史中に位置付けることはもちろん、古典の現代における価値も明らかにしよう努めなければならない。研究の緻密さを追求する結果、専門化、細分化が進んでいるが、同時に文明全体を俯瞰する視野や、さらには他文明の概要に関する知識を持ちつつ研究を遂行するべきであろう。

情報処理の応用は、古典学を大幅に変えつつあるが、なお開拓されるべき課題、分野が数多く残されている。そこから得られる成果は極めて大きいと予測されるから、諸古典学が共同して標準的処理技法の確立と普及に積極的に努めなければならない。

「古典学の再構築」も中間点を通過し、残すところ2年余となった。今後は、実際に連携研究から生じている成果を報告してゆきたいと考える。領域の殻を破る共同研究を強化すれば、多くの新発見がもたらされることと期待される。

1998 - 2002



古典学の再構築